

# 天国への階段

**Stairway to Heaven**

*Benjamin Joseph Sandahl*

あらすじ

仲神修司は武陽高校の3年生だが、父親の仕事の関係で母親も海外に帯同していて一人暮らしをしている。

ほとんど学校へ行っていない修司に担任の税所から連絡が入る。病気で2年生のときに学校を辞めた山城卓也が入院したという。

「これが最後の入院になるだろう」

卓也を見舞う修司。卓也は富士山の写真集を見ている。卓也は富士山を見たことがないと言う。

修司は身の周りの物を処分してお金をつくり、卓也の入院する病院に向かう。

修司は卓也を誘い、オンボロのラストウルフと名付けられた車で富士山への修学旅行へと出かけていく。

人物

仲神 修司(18・20) 武陽高等学校生徒  
母親(43・45) 修司の母親  
山城 卓也(17) 武陽高等学校元生徒  
山城 礼子(39) 卓也の母親  
税所 和郎(35) 武陽高等学校教師  
美紀子(29) 税所の妻  
親父さん(46) 中華『栄華』店主  
おかみさん(45) 親父さんの妻  
佐竹 義直(32) 陽高等学校教師  
矢羽 健吾(20) 修司の先輩  
奈央子(24) スナック『水族館』のホステス  
親父さん(48) 中華『栄華』店主  
おかみさん(45) 親父さんの妻  
井本(17) 武陽高等学校3年生  
客(35) スナック『水族館』の常連客  
店長(38) バイクショップ『Fire Wheels』店長  
不動産屋(54) 中丸不動産店主  
受付嬢① 菅沼厚生病院受付嬢  
受付嬢② 北武医大病院受付嬢  
親父さん(48) 中華『栄華』店主  
おかみさん(45) 親父さんの妻  
教師 A  
教師 B  
男教師  
女教師 A  
女教師 B  
観光客

○仲神家・修司の部屋（朝）

レースのカーテン越しに射し込む陽光。寝起きのままの乱れたベッド。

雑然と本が散乱している勉強机。

ベッドと机の上以外は整然としている。

バタンと部屋の前ドアが閉まる音に続き、

足早に階段を下りる音。

階下より聞こえてくる仲神修司（20）と

母親（45）の会話。

修司の声「行ってくる」

母親の声「朝ごはんは？」

修司の声「いらねえ」

母親の声「お母さんが丹精込めて作った朝ごはん

を食べてかない。ほう、なかなかいい度胸

してるじゃないの」

修司の声「わかったよ。食ってくよ」

窓外からの風に緩やかになびくレース

のカーテン。

○税所家・居間（夜）

照明の消えた薄闇の中、スマホで電話を  
している税所和郎（35）。

税所「——わかりました。仲神には私から。…  
：はい、それでは（電話を切る）」

居間の入口に立ち照明を点ける妻の税

所美紀子（29）。

美紀子「照明くらいつけたらいいのに」

税所「ん!? ああ」

美紀子「大事な話？」

税所「——いや」

美紀子「（微笑み）そう」

税所「滯は？」

美紀子「寝たわ」

税所「そうか」

○中華『栄華』・店内（夜）

ほぼ満席の店内――。

カウンターの奥の厨房で調理をする親

父さん（46）とおかみさん（45）。

空いた席の皿を片付けている仲神修司

（18）。

客A「修ちゃん、ビール」

修司「ビール一丁」

おかみさん「あいよお」

親父さん「レバニラあがったよお」

客B「修ちゃん、味噌と餃子ね」

修司「味噌に餃子あ」

おかみさん「あいよお」

○税所家・居間（夜）

ソファ―に腰掛けグラスをかたむけて

いる税所と美紀子。

急に飛んでいた蚊を叩く美紀子。

美紀子「（掌を見て）まだいるのね」

税所「（美紀子の掌を見て）痛かったかな？」

美紀子「私の手？」

税所「蚊だよ。元気に飛んでいたのに、突然叩

かれて潰されたわけだ。叩かれた瞬間、苦痛

を感じたかな？」

美紀子「――そうね、あの蚊は今、運命とか神

の存在を感じていると思うわ」

税所「神の存在？」

美紀子「あの蚊がこの広い地球上でよ、反射神経のトロさではギネス級の私の前を飛ぶ確率なんて、限りなく0に近いのよ」

税所「……」

美紀子「未だに生きていられる自分の運の良さを神に感謝しているはずだわ」

税所「獲れなかったのか？」

美紀子「（微笑む）——」

税所「運命ねえ……」

税所、グラスをかたむける。

○中華『栄華』・店内（深夜）

閉店後の店内——。

テーブルの上にイスが片付けられている。

厨房を片付ける親父さんとおかみさん。

カウンターに座る修司の前に置かれた

コーン山盛りの大盛ラーメン。

親父さん「飯がよ、ちようど最後の客でなくな

っちまってな」

おかみさん「チャーシューもメンマも終わっち

やたんだよお、ごめんねえ」

修司「俺、コーン好きっすから。いただきます」

と、ラーメンを食べ始める。

○同・表（深夜）

暖簾は下ろされている。

店内から修司が出てきて、店の脇に止め

てあったバイクに跨りエンジンをかける。

○ 繁華街（深夜）

走り抜けていく修司の乗るバイク。

タイトル

『天国への階段』

——Stairway to Heaven——』

○ 修司の住むマンション・修司の部屋（深夜）

テーブルの上に散らかる雑誌やカップ

麺、菓子等の食べ残し。

床に脱ぎ棄てられた洋服等——。

スマホをテーブルに置き、服を脱ぎ始める修司。

スマホ（スカイプの着信音）が鳴る。

スマホの画面を見る修司。

スマホ画面の発信者の名は「ババア」である。

苦虫を噛み潰したような表情の修司を。

しばらく鳴り続けていたスマホが鳴り

止む。

再びなり始めるスマホ。

溜息一つ。スマホに出る修司。

母親（43）の声「母親からの電話を無視するなんて、いい度胸してんじゃないの」

修司「着替えてたんだよ」

母親の声「学校へ行ってないそうね」

修司「……」

母親の声「お父さんの仕事が一段落したら、お母さんだけでも日本に帰るから。それまで親に心配を掛けないでちょうだい」

修司「……」

母親の声「返事は？」

修司「わかったよ」

母親の声「ちゃんと食べてる？」

修司「ああ」

母親の声「肉ばかりじゃなく野菜も食べることに」

修司「食ってるよ」

母親の声「お願いだから学校へはちゃんと行ってよね」

修司「わかってるって」

母親の声「それから――」

修司「お、凄え音がした。雷が落ちたみてえだ。

あ、電気が消えた。停電だ！」

と、通話を切る。

パンツ一枚の姿で冷蔵庫から飲み物を取り出して飲む修司。

LINEの着信音。

修司、「ババア」からのLINEを開く。

以下のLINE画面を。

『スマホは充電池で動くの。停電したからって切れるか。バーカ』

スマホをベッドに放り投げ、飲み物を飲む修司。

む修司。

スマホの着信音が鳴る。

舌打ちをし、電話に出る修司。

修司「わかったって、学校へは行くって」

税所の声「ホントだな」





スマホの着信音。  
スマホで話しながら入っていく修司。  
修司「もしもし、なんだ、健吾か——」

○同・校庭

体育の授業を指導している佐竹義直

(32) 教諭。

その横をスマホで話しながら横切る修司。

修司「見つかつた?! ホントかよ、ちゃんと動くんだろうな?」

佐竹「仲神……」

修司「わかつた、用が済んだら行くわ。ああ、じゃあな(通話を切る)」

佐竹「(語気荒く) 仲神!」

修司「(立ち止まり、佐竹を見る) ——」

佐竹「学校に何の用だ?」

修司「……」

佐竹「退学する決心がついて荷物でも取りに来たか?」

修司「……」

佐竹「勉強する気がないなら、学校なんてとつとと辞めちまえ。クソはクソらしく生きた方が楽だぞ」

修司、佐竹を無視し、校舎に向かって歩き出す。

○同・職員室前の廊下

歩き来た修司が職員室のドアを開ける。  
職員室を見回す修司。

が、職員室には誰もいない。

○同・屋上

フェンスにもたれ、弁当を食べている修司、顔を傾け校庭の体育の授業に目をやる。

○回想・武陽高等学校・校庭

修司に意見する佐竹。

佐竹「勉強する気がないなら、学校なんてとつとと辞めちまえ。クソはクソらしく生きた方が楽だぞ」  
回想終わり。

○武陽高等学校・屋上

フェンスにもたれ、弁当を食べていた修司、食べ終えた空の弁当箱に箸を放り入れる。

修司「クソねえ……」

○同・3年A組

英語の授業中――。

教壇に立つ税所。

税所「よし、井本、続けて読んでみる」

立ち上がり、教科書を読む井本(17)。

(窓外の)校庭を横切り去って行く修司に気付く税所。

○同・校舎

終業のチャイム――。

○同・職員室

昼休み――。

佐竹「(絶叫) うわああああああ!!」

自分の机から飛び上がるように立ち上がる佐竹。

食事を中断し佐竹に注目する先生方。

教師A「どうしました?！」

教師B「何があったんですか、佐竹先生?」

佐竹の周囲に集まる先生方。税所もその中にいる。

机に置かれた弁当箱を指差し、

佐竹「俺の弁当箱の中に?！」

一同「(驚き)!!」

男教師A「(隣の税所に小声で)立派ですね」

税所「(小声で)まるで鬼の金棒ですな」

佐竹「(怒り)だ、誰が――」

女教師A「(怒り調子で)佐竹先生、早く片付

けてください！」

窓を開け放ちながら、

女教師B「まったくう、食事中ですよ」

佐竹「そ、そんなこと言ったって――」

女教師A「(怒り)早く蓋を閉じてください！」

佐竹「(泣きそうな表情で)――」

○バス停(夕)

バスが停車し、税所が降りてくる。

バス停のベンチに俯き座っている修司。

税所「(修司に気付き)よお」

修司、顔を上げ、税所を確認する。

立ち上がり歩き出す修司。

税所「あ、おい、仲神」  
修司「私立の教師ってなあ結構いい給料貰うんだろ。飯ぐらい奢れよ」  
税所「まあ、わるい給料じゃない。だがな、決していい給料でもないぞ。拘束時間は長いし、そのうえ気苦労は——。あ、おい、仲神！」  
と、仲神を追う。

○ファミリレストラン（夕）

食事をしている修司と税所。

税所「一人暮しはどうだ？」

修司「（ガツガツと食べている）——」

税所「お母さんから電話あったか？」

修司「（食べながら税所を睨む）——」

税所「飯はどうしてる？ 自分でつくったりもするの？」

修司「（ガツガツと食べている）——」

税所「もっとゆっくり食え。でないと——」

と、何かに気付きしばらく考える。

税所「なあ、つかぬことを聞くが、おまえ、昨日

日の晩飯は何を食った？」

修司「（食べながら税所を見て）——」

税所「何を食った？」

修司「関係ねえだろ。卓也のことで話があるんじゃないかねのかよ」

税所「いいから、それだけ聞かせてくれ。昨日の晩は何を食った？」

修司「（しばらく考え）ラーメン……」

税所「ラーメン?！」

修司「山盛りコーンのラーメン」

税所「（ニマ〜と笑み）——」  
修司「何だよ、その気持ちの悪い笑いはよ」  
税所「いや、何でも無い。あんな仲神、飯はな、もつとゆつくり、よく噛んで食べた方がいいぞ。よく噛んでな、うん」

○公園（夜）

鉄棒にもたれる修司と税所。

税所「俺もな、いろいろ考えたんだが、ありのままを話すことにした」

修司「何のことだよ？」

税所「昨日、山城のお母さんから電話があった。

山城が、入院した」

修司「……」

税所「今度が、多分……、最後の入院になる……  
： だろうということだ」

修司「……」

税所「……」

修司「（税所を見る）最後？」

税所「あんな、仲神……」

修司、歩き出す。

税所「仲神!？」

修司、やがて走り出す。

税所「（言葉が出てこない）——」

修司、走り去って行く。

税所「……」

○菅沼厚生病院・ロビー（夜）

照度が落とされた人気がない待合室。

受付に走り込んで来る修司。

修司「病室知りたいたいんだけど」

受付嬢①「ご面会ですか？」

修司「ああ」

受付嬢①「基本的にご家族以外のご面会はご遠慮いただいておりますが」

修司「家族?! 家族ならいいんだろ」

受付嬢①「ご家族さまですね。では患者さまのお名前を」

修司「卓也、山城卓也。山城の山は山城の山、城は山城の城」

受付嬢①「(パソコンのキーボードを叩き)山城さまというお名前では見当たりませんが」  
修司「そんな筈ねえよ。いつもこの病院なんだよ」

再びパソコンのキーボードを叩き、

受付嬢①「やはり山城さまでは見当たりません。

もう一度病院名をお確かめになってみては」  
修司「(考え)……」

修司、出口に向い走りだす。

○スナック『酔族館』・表(夜)

○同・中(夜)

カウンターを挟んで談笑している客(35)とホステスの奈央子(24)。

客の横に座る山城礼子(39)。

客「(礼子の耳元で)なあ、一度くらい付き合ってもエエんちゃうか？」

奈央子「無駄ですよ。ママの堅いのは知ってるでしょ。人呼んで蜘蛛の巣礼子」

客「そら大掃除が必要やで。せや、わしが大掃除したる」

奈央子「無理無理」

客「奈央く、時には応援したってえな」

礼子「蜘蛛の巣か……。掃ってもらおなうかな」

客「ホ、ホンマか?! わし、本気にするでえ」

奈央子「(たしなめ) ママ」

礼子「何だっついていいの、嫌なこと忘れられるなら」

扉が開き、修司が入ってくる。

奈央子「いらっしやいませ」

客「(礼子の耳元で) 早速、今晚どや？」

礼子「(修司に気付き) 修ちゃん?!」

修司「卓也は？」

客「(礼子の耳元で) 銭やったら——」

修司、客を突き飛ばす。

礼子「修ちゃん?!」

客「な、何や、このガキは」

修司「卓也は？」

○同・表(夜)

止めてある自分のバイクにもたれる修司。

店の壁にもたれる礼子。

礼子「北武医大病院……」

修司「北武医大病院？」

礼子「大学病院の方がね、設備がいいの」

修司「……」

礼子「苦しませたくないから……」

修司「……」



礼子「顔見せに、行ってやってくれ」

修司、ヘルメットを被る。

礼子「修ちゃんの顔見るとね、元気出るんだ、あいつ」

修司、バイクのエンジンを掛け、

走り出す。

走り去って行く修司のバイク。

天を見上げる礼子。

玲子の目から一筋の涙が流れ落ちる。

○北武医大病院・正門（夜）

○同・卓也の病室（夜）

個室――。

ベッドに横たわり富士山の写真集を見ている山城卓也（17）。

卓也「（人の気配に）母さん？」

入ってくるマスクをした修司。

卓也「修ちゃん?!」

と、上体を起こす。

修司「無理すんな。寝てろって」

卓也「母さんから聞いたの？」

修司「ああ」

修司、ベッド脇のイスに腰掛け、マスクを外す。

卓也「よく入れたね。家族以外は結構厳しいんだよ」

修司「受付で名前書くだろ。おまえの兄貴ってことにして『山城修司』て書いてきた」

卓也「（笑顔で）兄貴か。なら家族だ」



修司「何言つてんだよ、良くなりやいくらでも見れるじゃねえか、富士山ぐらいよ」

卓也「……うん」

修司「それよか、どうなんだ、身体は？」

卓也「……」

修司「この病院にいりや良くなるのか？」

卓也「どこにいたって同じさ」

間――。

修司「ああ、そうだ、いいモン見せてやる」

と、運転免許証を取り出し卓也に渡す。

修司「四輪だぜ」

卓也「すごいじゃん。取ったんだ」

修司「車買うからよ。買ったら乗せてやる」

卓也「本当に?! 絶対だよ、約束だからね」

修司「ああ」

卓也「元気になつたら髪を染めるんだ。髪を染

めてさ、カツコイイ服着てさ、そして、そし

てさ……」

と、声を詰まらせる。

修司「元気だせ、卓也」

卓也「そしてさ、修ちゃんの前転する車に乗っ

て、富士山に……、本物の富士山に……」

――

目に涙をため、声を詰まらせる。

修司「……」

○中華『栄華』・表

暖簾は下ろされ、『準備中』の札が掛けられている。

○同・店内

厨房で忙しそうに立ち働いているおかみさん。

カウンターの前に立つ修司。

おかみさん「(修司に気付き)あれ、修ちゃん、いつ来たんだい。気付かなかったよお」

親父さん「(奥から顔を出し)おう、修坊、ケガしたって? どうなんだ?」

修司「親父さん」

親父さん「何だ、どうした?」

修司「あの…、バイト、一ヶ月、休ませてもらえないスか」

親父さん「一ヶ月?! 何かあったか?」

修司「…」

おかみさん「ケガ、悪いのかい?」

修司「それと、今月のバイト代、2、3日中に貰えないスか?」

親父さん「何に使う?」

修司「あの…」

親父さん「(修司を見て)——」

修司「…」

親父さん「おめえが稼いだ錢だ。バイト代は明日出してやる。取りに来な」

修司「(軽く頭を下げ)——」

親父さん「修坊、一ヶ月だな?」

修「はい」

おかみさん「待ってるからね」

修司「(一礼)——」

修司のバイクを査定している店長(38)。  
店長「そうねえ、8万でとこかな」  
修司「8万?! たったのかよ?」  
店長「確かにきれいには乗ってるけど、年式が古いからなあ」  
修司「35万で買ったんだぜ」  
店長「中古でな」  
修司「あんたオレに言ったじやねえか。このバイクなら下に出すときも結構な値がつくつてよお」  
店長「しょうがない、9万出そう」  
修司「切りのいいところで10万てのはどうよ?」  
店長「9万が精一杯だよ」  
修司「10万」  
店長「9万だ」  
修司「ビンボ勤労高校生からかすめようってのか」  
店長「9万以上は無理だつて」  
修司「仲間とつるんで不買運動すんぞ。いいじやねえか、オレから損こいた分、他の奴から儲けりゃあよ」  
店長「(溜息をつき) わかったよ、10万だ。これ以上ビター文出ないぞ」  
修司「よお、し、商談成立」  
修司、バイクに跨りエンジンを掛ける。  
店長「なんだよ、売らんじゃないのか?」  
修司「売るのは明日だ。今売っちゃうと足がなくなるからな」  
走り去って行く修司のバイク。

店長「おい、バイクに傷付けつと、その分値引くからな！」

○矢羽板金自動車・工場

修理中の数台の車。

工場の前に修司のバイクが止まる。

修司「健吾いるかあー」

修理中の車の下から出てくる矢羽健吾

(20)。

健吾「おう、修司か」

修司「見つかったって？　どれよ？」

○同・スクラップ置き場

スクラップの間を歩く健吾と修司。

修司「3万でいいんだな」

健吾「おお、おまえじゃしようがねえや」

修司「ちゃんと走るんだろうな？」

健吾「バカ言ってる。オレが整備したんだぜ。

どんなに乱暴な運転をしようが半年は保証してやる。ほら、あれだ」

と、指差す古く汚い乗用車。

修司「汚ったねえ」

健吾「これだから素人は嫌だつうの。いいか、

車は見た目じゃねえの、中身よ、中身」

修司「中身ねえ」

健吾「こいつは別名ラストウルフ。レゲエ親父のダンボールをまとっちゃいるが中身はビ

シバシの——」

修司「狼だっつか？」

健吾「おっ、わかってんじゃん」

修司「どうでもいいけど、コレ、本当に走んだろうな？」

健吾「ほざいてる。天才整備士の腕を思い知るがいいぜ」

と、キーを投げる。

修司、運転席に座りキーを回す。

が、セルは回るがエンジンが掛からない。

健吾「あれえ、おっかしいなあ?！」

修司「(呟く) 何が天才整備士だよ」

健吾「修司、ボンネット開ける」

エンジンルームを点検する健吾。

車から降りスクラップに腰掛ける修司。

修司「直んのか？」

健吾「オレの名誉に懸けて直す」

修司「(呟く) おめえに名誉なんてねえよ」

健吾「何か言ったか？」

修司「何も。それよか健吾、この車、ナンバーが付いてねえけど？」

健吾「あたりめえだろ、廃車にしてあんだからよ」

修司「車検はいつ通すんだ？」

エンジンルーム点検の手を止め、

健吾「おめえ、もしかして、3万で車検付きの車買おうなんて虫のいいこと考えてんじゃねえだろうな？」

修司「(驚き) じゃ何、車検無しこのこのオンボ

ロ車が3万でことか？」

健吾「オンボロ車!?! ラスタウルフって呼んで

ほしいね」

修司「車検通すのにいくらかかる？」

健吾「この車をか？ 10万、否、12万でとこかな」

修司「12万?! 健吾、3万くらいでどうにかしてくれ」

健吾「そいつああ無理だ。重量税に自賠責、印紙代だけでも4万くらい掛かる。それに整備費用が加算されるからな」

修司「じゃあその4万くらいでどうにかしてくれ」

健吾「整備費用なしかよ」

修司「頼む、健吾」

健吾「うーん、オイルはサービスするとして、タイヤとブレーキパッドだろ……」

修司「頼む」

健吾、前輪と後輪を確認する。

健吾「通してみっか」

修司「恩に着るぜ」

健吾「オレという天才整備士の後輩に生まれたことに感謝しろよ」

修司「車の方も、頼んだぜ」

健吾「そこよ、そこなんだ」

修司「あ?!」

健吾「才能が邪魔してよ、適当に整備するとうことができねえのよ。ま、天才にしかわかんなねえ悩みとして聞き流してくれや」

修司「(愛想笑い) はは……」

健吾、再びエンジンルームの点検を始める。

健吾「なあ修司、オレも世界に羽ばたくにはそれなりの名前が必要だと思うんだ。名前とい



うか愛称だな。ポップ吉村みてえな。でよ、  
考えたんだが、ロック矢羽ってどうよ？」

健吾「天才整備士に相応しい名だとは——」

健吾「もはや、修司の姿はそこにはない。」

○中丸不動産・表  
修司のバイクが止まっている。

○同・中  
ソファーで話す修司と不動産屋(54)。

不動産屋「そうですね、部屋の傷み具合にも  
よりますが、敷金が戻るのは、まあ、半月く  
らいですかねえ」

修司「そこをなんとかしてほしいわけ。2く3  
日中にどうか」

不動産屋「そう言われましても、返金なさるの  
はあくまでも家主さんですからねえ」

修司「だからあ、家主の代わりに払ってくれつ  
て頼んでんじゃねえの」

不動産屋「それは無理ですよ」  
修司「(考え)——わかった、半分はどうよ？」

不動産屋「半分？ 半分でなんですか？」

修司「返金される金額の半分だけ払ってくれり  
ゃあいい。残りの半分はあんたにやる。どう  
よ？」

不動産屋「半分て……、本当に半分で？」

修司「(頷く)——」  
不動産屋「(ニカクツと笑む)——」

○中華『栄華』・表

暖簾の下の、開け放たれた引き戸の中に垣間見える盛況の店内。

○バイクショップ『Fire wheels』・表

36万円の値札が付き展示されている修司のバイク。

○修司の住むマンション・表

前出のラストウルフ（以後車と呼称）のトランクにスーツケースを積む修司。

3階のベランダから顔を出す不動産屋。

不動産屋「仲神さん」

修司「（不動産屋を見上げ）——」

不動産屋「このテーブルやベッドは？」

修司「世話になったからな、あんたにやるよ」

不動産屋「ちよつとお、困りますよ。処分する

にも結構かかるんですから」

修司「遠慮すんなって。じゃあな」

と、車に乗り込む。

不動産屋「ちよ、ちよつと待ってください。今

行きますから」

と、ベランダから顔を引っ込める。

○車の中

修司、エンジンを回す、

が、エンジンは掛からない。

修司「（独り言）頼むぜ、天才整備士」

再度エンジンを回す、

——が、エンジンは掛からない。

○修司の住むマンション・表

セルが空回りするだけでエンジンの掛からない車。  
マンションから不動産屋が飛び出て来る。

爆音と共に車のエンジンが掛かり、周囲に黒煙を撒き散らす。

不動産屋「仲神さん！」

トロトロと走り出す車。

不動産屋「待ってください、仲神さん！」

走り去っていく車。

追う不動産屋。

○北武医大病院・表（夜）

○同・卓也の病室（夜）

薄闇――。

寝ている卓也。

ベッド脇に立つ修司。

修司「（揺り起こし）卓也……、卓也……」

卓也「（目覚め）ん……、ん?! 修ちゃん？」

枕元のライトを点灯し、枕元の目覚し

時計（21時少し前）を見て、

卓也「どうしたの、こんな時間に？」

修司「こんな時間で、まだ9時前だぜ。寝るの

早えーって」

卓也「言われてみればそうだね。でも病人は他

にやることがないからね」

修司「じゃあ富士山に行こうぜ」

卓也「え?!」

修司「富士山に富士五湖だろ、えーと、それから……。とにかく、いろんなところ行って、いろんな物見てよ……。な、行こうぜ」  
卓也「——どうやって？」  
修司「（ニカッと笑う）——」

○同・駐車場（夜）

前画面の表情のままの修司——。

画面引き、笑顔で車に手を掛けている修司を。

パジャマ姿の卓也が驚いている。

卓也「スッゲー……」

修司「だろ」

卓也「オンボロ」

修司、カクンと首を折る。

修司「あんな、車は見た目じゃねえの。中身よ、中身。こいつは別名ラストウルフ。レゲエ親父のダンボールをまどつちやいるが、その正体は——」

卓也「狼？」

修司「わかってんじやないの」

卓也「速いんだ」

修司「実を言うと、あんまし速くねえ」

笑う修司と卓也。

修司「ここにいたって同じなんだろ？」

卓也「……」

修司「ここにいなきゃマズイのか？」

卓也「そりゃあ……」

修司「おまえは行く前に辞めちまつたし、オレも停学くらってて行けなかった」

卓也「何のこと？」

修司「修学旅行さ」

卓也「修学旅行!？」

修司「行こうぜ」

卓也「修学旅行か……」

病棟を振り返る卓也。

修司「行こうぜ、卓也」

卓也「……」

修司「修学旅行へよ」

卓也「でも——」

修司「でも、何だよ？」

卓也「……」

修司「富士山に行きたくないのか？」

卓也「行きたいよ」

修司「修学旅行に行きたくないのか？」

卓也「行きたいよ」

修司「なら行こうぜ」

間——。

卓也「うん、ここにいたって時間は過ぎていく。

ただ寝て、時が来るのを待つだけなんだ」

修司「……」

卓也「行こう」

修司「決まった。乗れよ」

卓也「この格好で？ 電話も持ってきてないよ」

修司「病室抜け出したの見つかつたら、監視が

厳しくなつて、二度と抜出せなくなるぜ」

卓也「だけど——」

修司「いいから乗れつて。オレに任せろ」

車の助手席に卓也を押し込む修司。

○車の中（夜）

助手席に座る卓也。

運転席に修司が乗り込みドアを閉める。  
修司、キーを回すがエンジンが掛からない。

卓也「これで富士山まで行けるの？」

修司「心配すんな。天才整備士の整備した車だ。

どんなに乱暴な運転をしようが半年は保証  
されてる」

卓也「運転する以前の問題だと思っただけ」

○北武医大病院・駐車場（夜）

爆音と共に周囲に黒煙を撒き散らしエ  
ンジンの掛かる車。

修司の声「な、この車、エンジンが掛かるんだ  
ぜ、すげえだろ」

黒煙を撒き散らしながらトロトロと走  
り出す車。

○ファミリーストラン・駐車場（早朝）

夜明け――。

駐車場の隅に止まる車。

その車内で寝ている修司と卓也を。

○ユニクロ・表

店内から出てくる修司と卓也。卓也は  
Tシャツにジーンズ、ジャケット姿で。  
修司、紙袋から卓也のパジャマのズボン  
を取り出し広げる。

○美容室・中

カットされている卓也。  
その横で美容師に注文を出している修  
司。

○メガネ屋・表

扉が開き出て来る修司と卓也。二人共  
サングラスをかけている。卓也の髪は  
金髪に染められ、きれいにカットされ  
ている。

○コンビニエンスストア・表

駐車スペースに止めてある車の脇に立  
つ卓也。

店から出てくる修司。

修司「さあ、仕上げだ」

卓也「何？」

買って来たマジックで運転席のドアに

『S・N A K A G A M I』と書き、

修司「F1とかよ、乗ってる奴の名前が書いて

あんだろ。あれよ」

卓也、マジックを受取り、

助手席のドアに大きく『山城卓也』と

書く。

修司「センスねえよ」

自分の名前を眺めながら、

卓也「(満足そうに) いいんだ、これがボクの名前なんだから」

○走る車の中

運転している修司、  
助手席の卓也の膝の上に道路マップ  
を放る。

卓也「――？」

修司「ナビはおまえだ」

卓也「地図の見方なんてわかんないよ」

修司「ドライバーはナビの指示通りに走る。卓  
也、おまえが行きたいところを指示しろ」

卓也「そんなこと言ったって……」

赤信号で車が止まる。

右にウィンカーを出す修司。

修司「いいか、これはオレとおまえの修学旅行  
だ」

卓也「……」

修司「行きたいトコいっぱいあんだろ？」

卓也「……」

修司「見たいモンいっぱいあんだろ？」

間――。

卓也「行きたいトコも見たいモンもいっぱいあ  
る」

修司「……」

卓也「道を間違えても文句言うなよ」

修司「ああ」

卓也「ボクの行きたいトコに行っていんだね」

修司「ああ」

卓也「最高の修学旅行にしよう」

修司「ああ」

卓也「ボクがナビゲーターだ」

修司「よっしゃあ！」

卓也「ナビの指示通りに走れよ、ドライバー」



修司「おう！」

○交差点

信号が変わり、車走り出す。

卓也の声「富士山に向かって、直進！」

ガクンと止まる車。

修司の声「高速に入るにはここ右だぜ……」

卓也の声「え?! あそう。じゃ右へ行つて」

修司の声「平気かよ」

卓也の声「はい、そこ、文句言わないって約束

でしょ」

修司の声「はいはい」

車、右に曲がり高速道路へ入る側道を駆

け上がって行く。

補強した車のアンテナ(古い車なのでラ

ジオ用のアンテナが付いている)に鯉の

ぼりよろしく棚引く卓也のはいていた

パジャマのズボン。

卓也の声「修学旅行へ、出発！」

修司の声「イエーイ！」

○高速道路を走る車の中

山間を走っている――。

卓也「ねえ、窓開けていい？」

修司「寒くねえか？」

卓也「平気さ」

と、窓を開ける。

深呼吸をする卓也。

修司「気分がわるいのか？」

「」

卓也「ちがうよ。山の匂いを嗅いでみたかったのさ」

修司「どんな匂いがした？」

卓也「懐かしい匂いがしたよ」

修司「懐かしいってどんな匂いよ？」

修司、運転席側の窓を開ける、

と、右側を追い越していく大型トラックの真っ黒な排気ガスが車内に吹き込み、むせる修司と卓也。

修司・卓也「(中指を突き立て)バカヤロー！」

窓を閉め、

修司「つたく何考えてんだよ、あんな車走らせてよ」

卓也「ホントだよ。ああいうのを走らせておく

うちは地球環境の好転は望めないね」

○山間を走る高速道路

黒煙を撒き散らしながらトロトロと走る車を。

○高速道路・料金所

料金を払う修司。

○首都高速道路・合流地点

渋滞――。

車線変更のため助手席から顔を出し車を割り込ませてもらう卓也。

○高速道路・サービスエリア

車にもたれソフトラクリームを食べている修司と卓也。

○道路

走り過ぎていく車。

○道の駅・駐車場

ボンネットの上で地図を確認している  
修司と卓也。

眼前の雲の切れ間に富士山の一部が現  
れる。

卓也「見て、見てよ、富士山だよ……」

修司「ああ」

卓也「本物の富士山だよ……」

修司「――」

富士山を見ている卓也。  
横目で卓也を見ている修司を。

○山中湖・湖畔の駐車場

車が止まり、修司と卓也が降りてくる。  
湖面を眺める修司と卓也。

卓也「山中湖は富士五湖の中で最も広く、別名  
三日月湖とも呼ばれている。湖面の標高は

982メートル、周囲13キロ。我が国では中

禅寺湖、榛名湖に次ぐ高所にある湖である」

修司「まるで観光バスのガイドだね」

卓也「ボクのは机上で覚えた案内文さ。でもね、  
こんなことガイドブックには載ってなかつ

たよ」

と、正面の富士山を仰ぐ。

卓也「富士山でデカイよね」

修司「ああ」

卓也「すっごくきれいだよね」

修司「ああ」

嬉しそうに富士山を眺めている卓也。

修司「あのよ……」

卓也「？」

修司「おまえ、最近、どっか行っただけ？」

卓也「行かないよ。どうしてさ？」

修司「さっきの観光ガイド、飛行機の中で憶え

たんだろ」

卓也「何それ？」

修司「あ、いや、何でもない。さ、どっか行っ

てみようぜ」

卓也「わかった！ 机上の意味がわかんなかった

たんでしよう」

修司「うるせえよ。それよかどっか行こうぜ」

卓也「きじょうつてのは飛行機に乗ることじゃ

なくて、机の上のことなの」

修司「うっせうっせうっせ！」

はしやぐ修司と卓也。

○ 民宿『湖畔荘』・駐車場（夕）

車が止まる。

修司の声「疲れたか？」

卓也の声「平気さ」

修司の声「ちよつと待ってる、部屋あるか聞いて

てくるから」

運転席のドアが開き修司が降りてくる。

○ 同・浴場（夜）

湯船に浸かる修司と卓也。

卓也「1年の時の体育祭、憶えてる？」

修司「(無然と)憶えてねえよ……」

卓也「修ちゃんがリレーの選手で……」

修司「クラス全員で共謀して、欠席していたオレにリレーの選手を押し付けやがった」

卓也「なんだ、憶えてんじゃない」

修司「忘れるわけねえだろ」

卓也「修ちゃんをリレーの選手に推選したの、実はボクなんだ」

修司「何イッ!! おまえか?！」

卓也「修ちゃん、ゴールまであと10mでここで転んで……」

修司「(無然と)——」

卓也「(笑いながら)転んだ拍子に短パンが半分脱げて、全校生徒の前で半尻晒しちゃってさ——」

修司「(無然と)——」

卓也「あんなブカブカナ短パンはいて走るからだよ」

修司「うるせえよ」

卓也「けどさ、本番は絶対無断欠席だと思ってたのに、よく出てきたね」

修司「オレも若かったからな」

卓也「何それ？」

修司「税所に脅された」

卓也「先生に、何て？」

修司「リレーの選手が揃わず不戦敗となったら、おまえにはその罰として永久日直をやつてもらおう」

卓也「どこが脅しなのさ？」

修司「毎日、起立・礼の号令係だぞ。想像した

だけで鳥肌が立つぜ」

卓也「（笑い）弱点、見抜かれてるよね」

楽しそうに話をしてしている修司と卓也。

○同・食堂（夜）

食事をしていている修司と卓也。

修司「その刺身、食べないなら貰うぜ」

卓也「じゃあ、その卵焼き頂戴」

修司「ちよつと待て。芋の煮っ転がしで手を打たないか？」

卓也「刺身と芋じゃあ身分が違いすぎるでしょ」

修司「（考え）——、わかった、応じよう」

お互いが相手の皿に箸を伸ばす。

素早く二切れの卵焼きを口に入れる卓也。

修司「あー！ 一切れだけでしようが」

卓也「しようがない、この鶏の唐揚げあげるよ」

修司「やрийい」

と、卓也の皿の鶏の唐揚げを口に入れる。

修司「卓也は誰に推薦された？」

卓也「なんの話？」

修司「一年のリレーの時の話さ」

卓也「推薦じゃないよ、立候補したんだ」

修司「（驚き）バカか、おまえは」

卓也「なんでさ？」

修司「だって、おまえ、脚、遅いじゃん」

卓也「だからさ。一生に一度くらいやって見たかったのさ」

修司「あのさ、卵焼きって美味しいよな？」

卓也「うん」

修司「オレもそう思う。けどな、リレーの選手の気分を味わいたいという気持ちにはわかんねえな」

卓也「修ちゃんのは卵焼きよりもっと美味しいものをたくさん知ってるんだよ」

修司「はあ!? ラーメンとかか?」

卓也「(笑い) そう、ラーメンとかいろいろなものをさ」

修司「おまえだってラーメンくらい食ったことあるだろ」

卓也「そりゃあるけど……」

修司「だったら同じじゃねえか」

卓也「うーん、なんて言うかなあ?」

修司「でもよ、実はラーメンよかメンチカツの方が美味いと思うんだよな」

卓也「ステーキとかじゃないんだ」

修司「そりゃステーキは美味いけど、ありやあ

治外法権みたいなもんだからよ」

卓也「治外法権? それどういう意味さ?」

修司「この世のものとは思えない美味さって意味よ。だから普段の食い物と比べちゃいけないの」

卓也「あれ、なんの話してたんだっけ?」

修司「ラーメンよりメンチカツの方が美味いって話だよ。ちよっとだけだけどな」

と、卵焼きを口に入れる。  
修司「お、この卵焼き、治外法権的に美味え」

○同・修司と卓也の部屋(夜)

布団が敷かれ、それぞれの布団の上に

横になっっている修司と卓也。  
ガイドブックを見て、

修司「明日はどこは行く？」

卓也「（楽しそうに虚空を見据え）——」

修司「あさま神社なんてどうだ？」

顔を修司に向け、

卓也「せんげん神社のこと？」

修司「そういう神社もあるんだ。有名なの？」

卓也「あさま神社と書いてせんげん神社と読むの」

修司「え、そうなの？」

達也「明日はどこ行こうか？」

修司「あさま、じゃなかつた、その……浅間神社ってところ行ってみねえか？ 卓也が行き

たいところがあるなら別だけど、その……浅間神社もいいんじゃないか」

卓也「……リレーの練習のときさ、いろいろな面倒見てくれたよね」

修司「（卓也を見る）……」

卓也「正直、最初は怖かったよ。だって、修ちゃん、不良だったし」

修司「税所がこう言った、理由の如何を問わず最下位となった場合も責任をとってもらおう」

卓也「（笑う）永久日直に負けたんだ」

修司「別に負けちゃねえよ」

卓也「みんなが帰ってからも、バトンの練習に付き合ってくれた」

修司「そんなこと、あったな……」

卓也「いつからかなあつて思ってたさ、修ちゃんと話すようになったの」



修司「結局、オレが転んでビリ」

卓也「永久日直やらされなくてよかったじゃな

い」

修司「——明日、どこ行く？」

卓也「そうだな、浅間神社、行ってみようか」

修司「あ、それもいいな。よし、じゃあ、明日

は浅間神社に行ってみるか」

卓也「（楽しそうに）そうだね」

○忍野村

眼前に広がる富士の裾野。

黒煙を撒き散らしトロトロと走る車。

卓也の声「あの体育祭が一番の思い出なんだ、

二年間の高校生活で……」

修司の声「なんでオレを推薦した？」

卓也の声「え?!」

修司の声「卓也が推薦したんだろ？ オレをリ

レーの選手に」

卓也の声「そう、修ちゃんを推薦したのはボク

さ」

修司「なぜ推選したんだ？」

卓也「何故かな？ 何故なんだろう」

○忍野八海・湧池

池脇の際に立つ樹を背に立つ卓也。

スマホで卓也の写真を撮る修司。

その携帯電話を受け取り、今度は修司の

写真を撮る卓也。

卓也、観光客の一人に声を掛ける。

卓也「すみません。撮っていただけませんか」

観光客「いいですよ」

と、スマホを受け取る。

並ぶ修司と卓也の写真を撮る観光客。

卓也「(スマホを受け取り)ありがとうございます

ました」

修司「電源切っとけよ」

卓也「何で？」

修司「修学旅行の邪魔されたくないからな」

卓也「そうか……」

と、携帯電話の電源を切る。

卓也「ボクがいなくなつて、病院、大騒ぎだろ

うね」

修司「……」

卓也「母さん、心配してるかな？」

修司「(話題を変えるように)それよかよ、何

でオレをリレー選手に推薦したんだよ？」

卓也「何故かな？」

修司「嫌がらせか？」

卓也「そんなんじゃないよ」

修司「じゃあ何故？」

卓也「わからない……。運命かな」

修司「運命？」

卓也「多分、神様が仕向けたのさ」

修司「何のために？」

卓也「きつと、今、この時のためにさ」

修司「……」

○北口本宮富士浅間神社・鳥居

鳥居を見上げながら拝殿に向かう修司と卓也。

○同・拝殿

賽銭箱に小銭を投げ入れ、並んで拝む修司と卓也。

修司「薄目を開け卓也を窺う」――」

卓也「（拝んでいる）――」

修司、卓也に気付かれないようにポケッタから一万円札を取り出し賽銭箱に投げ入れ、再び拝む。

卓也「（拝み終わり修司を見る）――」

拝んでいる修司。

修司「（拝み終わり）よし」

卓也「随分長いね。何をお願いしたのさ？」

修司「なんでもねえよ。さ、次どこ行く？」

○富士急ハイランド

シャイニング・フラワー（大観覧車）に乗り込む修司と卓也。

× × ×

シャイニング・フラワーが回っている。その前の通路をアイスクリームを食べながら歩く修司と卓也。

× × ×

通路から、急降下してきた FUJIYAMA（コースター）を嬉しそうに指差す修司。嫌がる卓也。

× × ×

FUJIYAMAの出口から出てくる修司と卓也。

辟易とした表情の修司と歓喜の表情の卓也。



黒煙を撒き散らしトロトロと走る車。

卓也の声「(観光ガイド風に)富士スバルライ  
ンは河口湖から標高2305メートルの富  
士山の五合目までを結ぶ全長約30キロの有  
料道路でございます。途中、樹海や溶岩帯を  
縫って走るこのルートは日本一の山岳ドラ  
イブコースといえましょう。また五合目から  
の南アルプスの山々や駿河湾の眺望も……、  
うす、楽しみ!!」

○同・五合目・展望台

景色を眺める修司と卓也、  
いつまでも――。

○バーベキューレストラン

屋外のバーベキュー台でふざけながら  
食べる修司と卓也。

○土産物屋・中

土産物を物色している修司と卓也。

○精進湖・パノラマ台

景色を眺める修司と卓也。

修司「どうした、顔色良くねえぞ」

卓也「少し疲れたかな」

修司「おかしいのか?」

卓也「疲れただけだっ」

修司「――」

○ペンション『ホルン』・表(夕)

○同・食堂（夜）

食事をしている修司と卓也。

修司「明日はどうする？」

卓也「（ナイフ・フォークを置き）——」

修司「どうしたんだよ？」

卓也「そんなに減つてないんだ。ほら、バーベ

キュー食べただろ、だから……」

修司「体、おかしいのか？」

卓也「……」

修司「病院へ行くか？」

卓也「別に何ともないよ」

修司「……」

卓也「わるいけど、先に寝るよ」

と、席を立つ。

修司「待てよ、オレも行く」

残りの料理を頬張り、慌てて席を立つ。

○同・修司たちの部屋（夜）

ベッドに横になる卓也。

自分のベッドに腰掛ける修司。

卓也「母さん、心配してるかな？」

修司「……」

卓也「もうバレてるよね、ボクと修ちゃんが一

緒だったこと」

修司「そんなことより、明日はどうするよ？」

卓也「天国ってさ、空の高いところにあつて、

だから日本で一番天国に近いところは富士

山だと思ふんだ。地獄はどこにあるのか知ら

ないけど、ボクは天国へ行きたいな」

修司「何言ってるんだよ、急に」

卓也「こんなに近くで富士山を見たし、登ったことだってあるんだ。これでボクが日本人だってわかってもらえるよね」

修司「わかってもらえらるって、誰に？」

卓也「閻魔様さ」

修司「やめようぜ、こんな話」

卓也「大人になるつてのも、とうとうわからずじまいだな」

修司「大人になればわかるじゃねえか」

卓也「修ちゃんはなれても、ボクはなれない」

修司「何言つてんだよ、さつきから。そんなことより、明日行くところを——」

卓也「帰ろう」

修司「：：」

卓也「帰ろう」

修司「まだ見てないところも沢山あるんだぜ。金だつてまだあるし。そうだ、風穴行つてみねえか？ 帰りによ、伊豆の方へも周つてみようぜ」

卓也「人間てさ、生まれてから死ぬまで階段を上つているんだよ、きつと」

修司「何の話だよ」

卓也「赤ちゃんからこどもになって、少しずつ大人になって、年寄になつて、その階段は天に上る階段に続いているんだ」

修司「：：」

卓也「ボクは大人になる前に、天へ上る階段を上る：：」

修司「：：」

卓也「修学旅行つて、こどもが終わる最後の旅

行なんだよ。この旅行が終わればあとは卒業式さ」

修司「……」

卓也「今日ね、母さんにお土産を買ったんだ」

修司「……」

卓也「修学旅行に行ってきたって報告しなきゃ」

修司「寝るぜ」

修司、卓也に背を向けベッドに入る。

間――。

卓也「ごめん、修ちゃん」

○走る車の中

助手席で激しく早い呼吸を繰り返す苦

しそうな卓也。

運転する修司。

修司「（オロオロと）ま、待ってる、今、病院

に連れてってやるから」

卓也「帰ろう……。修ちゃん、か、帰ろう……」

修司「（半ベソ）ンなこと言っただってよ……」

卓也「しゅ、修学旅行は……まだ……終わっ

て……ないよ……」

修司「病院へ行かなきゃ――」

卓也「ナビの言う通り……に走る……んだろ」

苦痛に悶絶する卓也。

修司「卓也！」

○高速道路

黒煙を吐きトロトロと走る車。

○走る車の中



運転する修司。

助手席でグッタリしている卓也。

修司「(咳く) 走れ、走れよ、ラストウルフ」

卓也「(うわ言) か…母さん…」

修司「今連れてってやる、今連れてってやるから。もう少しの辛抱だから…」

卓也「しゅ…修ちゃん…」

修司「卓也」

卓也「修ちゃん…」

修司「オレがわかるか？」

卓也「あたり…まえ…じゃない…」

修司「もう少しだ。もう少しで家に着くからな」

卓也「修ちゃんを、リ…リレーの選手に…

推薦したのは…」

修司「卓也…」

卓也「(昏睡状態) ——」

修司「卓也！」

卓也「(うわ言) 修…ちゃん…」

修司「(泣きながら) オレのせいだ、全部オレの責任だ。どんな罰でも受けるからよ、元氣

になってくれよ。な、頼むよ、卓也」

卓也「(うわ言) 楽し…かった…ね…」

修司「卓也…」

卓也「(言葉にならない)…」

修司「卓也！ 卓也卓也卓也!!」

涙を拭う修司。

○北部医大病院・表(夜)

○同・駐車場(夜)

止まっている車。

○同・集中治療室（夜）

ベッド脇には心電図計等の救命装置が置かれ心拍数等を刻んでいる。ベッドで寝ている卓也。酸素マスクを付けられ――。  
傍らに立ち卓也を見ている礼子。

○同・集中治療室前の廊下（夜）

イスに座り頭を垂れている修司。  
病室から礼子が出てくる。

修司、礼子を見上げ、

――通路で脚を正し土下座する。

修司「（背中が小刻みに震えている）オレ……」

礼子、しゃがんで修司の上体を起こす。

修司「（泣いている）――」

礼子「（涙を流し、しかし微笑み）卓也ね、お

みやげを買ってきてくれたの。修学旅行のお

みやげだよって」

修司「……」

礼子「楽しかったって」

修司「……」

礼子「ありがとう、ありがとう、修ちゃん」

○同・集中治療室（夜）

寝ている卓也を見ている修司。

○同・ロビー（夜）

（表から）駆け込んでくる税所。

○同・駐車場（夜）  
止まっている車。助手席のドアが取り外されている。

○コンビニエンスストア・表（夜）  
『山城卓也』のサインのある車のドアを背負った修司がコンビニのレジ袋を手に店内から出てくる。  
周囲の奇異の目。

○北部医大病院・ロビー（夜）  
（病室から）受付に走り来る税所。

税所「すみません。あの、髪を染めた、背丈がこれ位の少年で……」

受付嬢②「あら、さっきの子かしら」

税所「どっちへ行ったかわかりますか？」

受付嬢②「この近くで一番空に近い場所はどこかって？」

税所「空に近い場所?!」

受付嬢②「ええ、そう訊かれたので、高い場所ならこの病院の裏の八幡神社じゃないかしらって教えてたんですけど」

○八幡神社・境内に続く階段（夜）

百数十段も真っ直ぐに続く細く急な石段。

その下に立ち階段を見上げている修司。  
『山城卓也』のサインのあるドアを背負い、手にはコンビニの買い物袋を下げている。

階段を昇り始める修司――。

○同・境内（夜）

頭上に瞬く星々。

眼下に広がる街の灯。

樹に立て掛けた『山城卓也』のサインの

あるドア。

その脇に座る修司。

買い物袋から缶ビールを取り出し栓を

開け、ドアの前に置く。

別の缶ビールを取り出し栓を開ける。

修司「さ、飲もうぜ」

と、一気にビールを啣る。

修司「これが大人の味だ」

天空を見上げ、

修司「観覧車から見た富士山、きれいだったよ

な」

修司、缶ビールを啣る。

修司「河口湖で遊覧船から見た富士山もスツゲ

ーきれいだったよな」

修司、缶ビールを啣る。

修司「オレさ、あんな美味しいバーベキュー、始

めて食った。治外法権の美味さだった。卵焼き

より、ラーメンより美味かった……」

修司の頬を伝う一筋の涙。

修司「富士山に登ったこと、忘れるなよ」

涙を拭う。

修司「オレのこと、絶対に忘れるなよ」

修司の横に立つ税所。

修司「（税所を見て）……」

税所、修司の前に座り、  
—— 買った物袋から缶ビールを取り出し、  
栓を開ける。  
ビールを呷る税所。  
修司「ビールって大人の味かな？」  
税所「……そうだな」  
修司「よかった」  
税所「……」  
夜空を見上げ、  
修司「なあ、どうすれば天国へ行ける？」  
税所「……」  
修司「一生懸命生きれば……、死んでから天国  
へ行けるかな？」  
税所「……」  
修司「天国へ行けばまた卓也と会えるかな？」  
税所「……」  
修司「今度生まれてくるときも、また卓也と友  
達になれるかな？」  
税所「……」  
修司「また友達になつて、そしてもう一度二人  
で富士山へ行けるかな？」  
税所「ああ、行けるとも」  
缶ビールを呷り、  
税所「……」  
修司「……」  
夜空を見上げる修司と税所、いつまでも

○ 北部医大病院・駐車場（夜）

止まっている助手席のドアのない車。

その助手席にぼんやりと現われる人間の形をした白い発光体。白い発光体が助手席から降り立つ。

○八幡神社・境内に続く階段（夜）

階段の下に立つ白い発光体が、ゆっくりと滑るように階段を上り始める。すると階段の最上段から遙か天空に向かいどこまでも続く鈍く光る階段が現われる。遙か天空に向かい階段を上っていく白い発光体――。やがて白い発光体は満天に輝く星々と同化し、キラリツと輝く。

○仲神家・修司の部屋（朝）

レースのカーテン越しに射し込む陽光。寝起きのままの乱れたベッド。雑然と本が散乱している勉強机。ベッドと机の上以外は整然としている。階下より聞こえてくる仲神修司（20）と

母親（45）の会話。

修司の声「ご馳走さん。行ってくる」

母親の声「あ、ちよっと待って」

修司の声「なんだよ」

母親の声「私のケータイ番号のババア登録を今

日中に変えること」

修司の声「何だよ？」

母親の声「何ですよ?! あんた、なかなかいい度

胸してるわね」

修司の声「わかったよ。クソババアに変えとく

わ。いってきます」

母親の声「こら待て！　もう……、気を付けて

息なさいよ」

ボタンと玄関のドアが閉まる音。

窓外からの風に緩やかになびくレース

のカーテン。

画面、ゆつくりと移動し、部屋の隅に立

て掛けてある『山城卓也』のサインのあ

る車のドアを捉える。

画面、更に雑然とした机の上に移動して

いく。

数冊の参考書が積まれ、開いたままのマ

ーカートの引かれた参考書の脇にビッシ

リと数式の書き込まれたノートが開い

たままになっている。

その奥にあるフォトスタンドを。

画面、フォト・スタンドに寄っていく。

フォト・スタンドには湧池で観光客にス

マホで撮ってもらった修司と卓也の写

真が飾られている。

了